



TITLE:

限界経済學 (新年特別號)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 限界経済學 (新年特別號). 經濟論叢 1930, 30(1): 28-66

ISSUE DATE:

1930-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129840>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第 卷 十 三 第

行 發 日 一 月 一 年 五 和 昭

新年特別號

所得稅に於ける累進率	法學博士	神戸 正雄
限界經濟學	文學博士	米田庄太郎
マルクス價值論の價值論	文學博士	高田 保馬
農家經濟の本質に關する一考察	經濟學士	八木芳之助
我國の救護制度	經濟學士	橋本 文雄
資本主義社會の機構に於ける貨幣の地位	經濟學士	柴 田 敬
商業の本質及商業經濟學に就て	經濟學士	谷口 吉彦
徳川幕府と紙幣の發行	經濟學博士	本庄榮治郎
六大都市特に大阪市の租稅負擔	經濟學博士	沙見 三郎
經營學の本質	經濟學博士	小島昌太郎
近着外國經濟雜誌主要論題		

限界經濟學

米田庄太郎

緒言

(一) クラークの經濟學方法論

(二) クラークの一般經濟學の根本原理Ⅱ普遍的經濟法則

(三) クラークの社會經濟靜學の根本原理Ⅱ靜學的經濟法則

(四) クラークの社會經濟動學の根本原理Ⅱ動學的經濟法則

(五) クラーク限界經濟學の方法論的批判一般

(一) 緒言

本雜誌昨年八月號の拙稿「限界經濟學と制度經濟學」第二節中に述べし如く、限界經濟學は千八百九十年代に、米國の經濟學界に於て、古典派に取り代はりて正統派の地位を占め、大に勢力を振ふて居たのである。然るに現世紀に入りてより、新しき諸傾向が續々發達し來り、そうして其等の諸傾向は夫れ夫れ特異な方針を有するに拘らず、種々に相交叉して居るが、殊に限界經濟學

を攻撃の標的とする點に於ては殆んど相一致して居る。要するに其等の新しき諸傾向は、種々の方面より限界經濟學を攻撃の中心的標的として、夫れ夫れ特異な方針に發達して來たのである。併し夫れが爲めに限界經濟學は、決して滅亡したのでない。新しき諸傾向の非難を顧慮し、又其等の諸傾向の主張を斟酌して、種々の修正を加へたが、併し其の根本的方針に於ては、限界經濟學は尙は有力なる經濟學者によりて固持されて居る。更に新しき諸傾向の非難攻撃に拘らず、限界經濟學を其の儘に固持する經濟學者も少なくない。是れ後に私が詳しく論述せんとするが如く、限界經濟學の根本的方針は、新しき學問論上から見て、新しき意味に解釋されねばならぬと思はれるが、しかもとにかく科學としての經濟學が存續する以上、永久不滅な或物を保有して居るからである。そうして新しき諸傾向の加へる非難によく注意して、種々なる修正を加へると同時に、其の永久不滅な或物を充分に闡明することは、殊に方法論上重要な課題であると思ふ。尙ほ私は方法論上から考察すると、限界經濟學は結局數學的經濟學に到着す可きものと考へるから、限界經濟學の方法論的考察は當然數學的經濟學の方法論的考察に進まねばならぬと信ずる。更に私の見る處によれば、數學的經濟學の方法論的考察を徹底的に遂成せんとすれば、數學的經濟學と數學論理學との關係を究明せねばならぬ。かくて私は先づ限界經濟學を考察し、次に數學的經濟學終りに數學的經濟學と數學的論理學との關係を考察したいと思ふ。但し私の知る限りに

於ては、數學的經濟學者中にもまだ、數學的經濟學と數學的論理學との關係を考究した人はないが、私は此の關係を深く究明することは、經濟學方法論上重要な一任務であると信ずる。

却説先づ米國に於ける限界經濟學を考察するに當つて、私は私の經濟學上の舊師ゼ、ビ、クラークの説を特に稍々詳しく吟味したいと思ふ。是れゼ、ビ、クラーク（現在のコロンビア大學經濟學教授と云ふは、ゼ、ビ、クラークの事である）は米國に於ける限界經濟學の創設者とも認めらる可き人にして、又少なくとも方法論の方面に於ては、米國に於ける限界經濟學は同氏によりて大成されて居ると思はれるからである。そうしてクラークの詳しく著作目錄は、同氏の第八十回誕生日祝賀論文集（Economic Essays）中に掲載されて居るが、同氏の經濟學の全般を組織的包括的に學ぶために特に重要なものは、The Philosophy of Wealth (1885), The Distribution of Wealth (1899), 及び Essentials of Economic Theory (1907) である。但し右の中の「富の分配」は、同氏をして世界的に著名ならしめ、アダム・スミスの「富國論」以來の英語經濟學書であるまで、讚賞された大著作であるが、併し夫れは殆んど全く同氏の經濟靜學の原理を論述するだけのものであるが、「經濟學理論の眞髓」は、「富の分配」に於て詳論されたる經濟靜學の原理を、簡潔平易に説述したる後（第一章より第十一章まで）、特に同氏の經濟動學の研究をかなり詳しく論述するものである（第十二章より第二十九章まで、第三十章は結論要目）から、同氏の經濟學全體を組織的に學ぶためには、

同書は最も適當なる著作である。

(二) クラークの經濟學方法論

先づクラークの經濟學方法論から考察し始めたいと思ふが、就ては先づ同氏が千八百八十五年に公にされた最初の著書「富の哲學」を考察するに、同書は *Economic Principles newly formulated* と云ふ副題名が附せられて居ることによりても察知される如く、傳統的古典經濟學說に種々重要な修正改造を加へたる創見を論述せるものにして、後に同氏の著名なる經濟靜學の根本諸原理として詳しく展開されたる諸見解は、粗雑ながら大抵同書中に論述されて居る。そうして同氏が其等の見解を、始めから如何に自分の創見と確信されて居たかは、同書緒言中に「此處に提出されたる諸理論は、其の効過は如何にあらうとも、他の人々の著作から借用されたものでない」と、言明されて居ることによりても、推察される。

尙ほクラークが自分の見解の獨創性を如何に確信して居られるかは、同書第二版(千九百一年)の緒言中には、自分の限界効用説或は最終効用説は、ゼヴォオンスの説からさへも獨立に到達されたるものなるを述べ、又「富の分配」の緒言中には、更にフォーン、チューネンの説をもまだ知らない時に、到達されたるものなるを述べ、又「經濟學理論の眞髓」の緒言中にも同「事を繰り返して述べられて居ることによりて推察される。隨ふて奧太利學派から學んだものでない」と考へられて居ることは云ふまでもない。そうして同氏の獨創性は今や一般に承認されて居るのて、チードも其の經濟學史上の好著作 *Histoire des Doctrines Economiques* (1932) の中に、新古典派の勃興を考究するに當つて「歴史派がまさしく大隆盛を極めた其の時機に、幾多の著名なる經濟學者が、同時に奧太利、英國、瑞西、北米合衆國等に於て、精實科學の狀態にて、或は彼等の云ふが如く純正經濟學の狀態にて、經濟學を構成する權利を、堂々として要求して來た」と述べて居る。尙ほ本雜誌前々號の拙稿に述べし、シュトレラーの

著書 *Statik und Dynamik in der theoretischen Nationalökonomie* (1926) 中では、シムンスターの説が如何にクラークの説に負ふ處大なるかは、略に指示されて居る。

右に述べし處によりて察知される如く、「富の哲學」はクラークの學說を發達史的に研究するに當つて、又其の獨創性をよく理解する爲めには、重要な意義を有するもの、隨ふて米國に於ける現代經濟學の發達を研究する爲めには、重要な意義を有するものであるが、併し同書出版の當時に於ては、Giddings の如く夫れによりて經濟學の新識見が始めて開かれたものゝ如く、激賞して居た人々のあつたに拘らず、(The American Economic Review, vol. XXII, No. 2, Supplement, June, 1927.) 經濟學界に於ては一般にあまり注意されなかつたと思はれるので、此の事は同書の第二版は、クラークが「富の分配」を公にして世界的名聲を博したる後、千九百一年に始めて刊行されたことによりても推察されると思ふ。但し Giddings は右に述べし如くクラークの經濟學上の功績を讚賞して居るが、クラークも亦自分の經濟學說の發達上 Giddings に負ふ處大なるを認めて居るので、「富の分配」の緒言中、同氏は自分の特に負ふ處大なる三人として、my teacher the late professor Karl Kries of Heidelberg, and my early associates in economic work, professor Franklin H. Giddings of Columbia University and professor Simon N. Patten of the University of Pennsylvania を擧げて居るのである。

今「富の哲學」はクラークの學說の發達、隨ふて米國に於ける限界經濟學の發達を研究する爲めに、歴史的に重要な文献であるが、併し經濟學方法論上に於ては別に注意す可き點はないかと思ふ。クラークは本書に於てはまだ經濟靜學と經濟動學との區別を立て、居ない。そうして經濟現象の究極的原因としての人性の大に擴張されたる概念や、「富に關する多くの過程の論究に於て一の單位として取扱はる可き一の有機體」としての社會の概念などの重要を強調して、大に倫理的見地を經濟學に注入し、傳來の經濟學的基本概念を種々に改造するのみならず、更に職業の倫理や、協働の原理や、非競争的經濟や、教會の經濟的機能等を重要視して傳來の經濟學の範域を大に擴張して居るから、當然傳來の經濟學の概念其物にも方法論上重要な改造を加ふ可きであると思はれるに拘らず、同書中ではクラークは方法論問題には殆んど觸れて居ない。尙ほクラ

ークが同書に於て大に倫理的見地を重要視して居ることから推察すると、同氏の經濟學概念は同氏が「私の師」と呼ばれるクニースの經濟學概念の如き、歴史的倫理的な經濟學概念となるであらうと思はれるが、併しそうなると同氏が同書の「價值論」や「需要供給の法則」や、「分配の法則」等に於て其の論究の基礎として居る自然科學的見地は、保持され難くなると思ふ。さればこそ同氏は歴史的倫理的經濟學概念を構成しなかつたのであらう。要するに同書に於けるクラークの經濟學は、方法論上から嚴密に批判すると、同一の經濟學内に於ては到底並存して相協力し難き、自然科學的見地と倫理的見地との二見地の上に建立されて居ると思はれる。かくて右の二見地を固持しながら、其の研究を益々進め、そうして嚴密に經濟學の概念を方法論的に規定せんとするに至つては、同氏は當然經濟學を根本的に二大部門に別たねばならなくなるのである。是れ私は同氏が後に經濟學を根本的に經濟靜學と經濟動學との二部門に大別されるに至れる、根本的な方法論的理由であらうと思ふ。そうして私は同書以後「富の分配」の出版に至るまでに、同氏の公にされた諸論文によりて、右の事態を明かにしたいと思ふが、あまりに紙面を費やす恐れがあるので、本論文に於ては之を省略し、直ちに「富の分配」及び「經濟學理論の真髓」に就て、同氏の最も圓熟せる經濟學方法論の根本思想を考究することとする。

却說クラークの考へる處によれば、經濟學の理論を生産論、交換論、分配論及び消費論の四部

門に分つ傳來の見方は正當でない。是れ財の生産、交換、分配及び消費の四者は、現實なる經濟生活に於て判然區別し得られるものでなく、そうして其の中の一は他の二つを包含するものであるからである。即ち編制されたる社會によりて遂行されるがまゝの富の生産は、交換と分配との二つとも夫れ自身の中に包含して居るのである。そうして此の事實は、經濟學理論の傳來の排列を、新しき原理に基いて完全に改造することを、先づ方法論上必要ならしめる。

夫れ傳統的には市場價格は交換の一現象にして、分配を決定するものと考へられて居る。そうして實際に於て、市場價格は先づ社會的所得の生産部類間グルプに於ける分配、次に生産小部類間サブグループに於ける分配、終りに各小部類内の生産因素間に於ける分配を決定するものであるから、單に市場價格のみに就て考ふれば、價格は交換の一現象にして、かくて交換は分配を決定するものと考へ得られる。然るに更に推し究めて行くと、市場價格は常に一定の正常標準即ち正常價格或は自然價格に歸着せんとするものにして、かくて價格研究の根本問題は正常價格或は自然價格は如何にして決定されるかを、究明するに在ることが覺られるが、今正常價格はつまり生産小部類内に於ける労働の賃銀及び資本の利子を夫れ夫れ平均せしめる分配上の一勢力の結果であることが發見される。かくて價格研究は結局分配論中の一問題となる。そうして交換論中から價格研究を除去すると、夫れはつまり社會の組織或は編制の理論に外ならぬものとなり、かくて生産論中に包攝さ

れるものなることが學ばれる。要するに方法論上嚴密に考ふれば、經濟學理論の傳統的部門別けに於ける交換論は、生産論と分配論とに分割されて消滅することになる。然るに更に推し究めて行くと、現實なる賃銀及び現實なる利子が、夫れ夫れ常に歸着せんとする正常賃銀及び正常利子は、つまりは夫れ夫れ勞働の限界生産力及び利子の限界生産力によりて決定されることが發見されるから、分配の研究は結局特殊的生産力の研究に歸着し、かくて分配論は生産論に包攝されることとなる。されば社會的生產論は消費以外の一切の經濟的範域を包括する理論にして、經濟學理論は結局社會的生產論と消費論とに大別されるのである。

併し此處に一の問題が起り得る。夫れは經濟學理論の傳統的部門別けに於ける交換論も分配論も、つまりは總て生産論中に包攝されるのに、獨り消費論のみが、之れに對立する一部門として存立するのは、何故であるかと云ふ問題である。是れ交換も分配も本來社會的現象にして、社會が存立せねば存在し得ないものであるから、生産が社會的に遂行される以上、當然其の中に包攝されるのであるが、然るに消費は本來個人的過程にして、社會内にありても根本的には個人的に行はれるものである（吾人は食物を協働的に生産するが、各々己れ自身の爲めに又己れ自身で之を消費する。もつとも社會性又は共同性を賦與することがある。例へば宴會や、又一緒に音樂、演説を聴く場合に於て見るが如くである。しかも消費に於ては、生産に於ける協働に類するが如きものは存在せず、部類體系の如きものも、資本と勞働との協働の如きものも亦存在しない）。要するに人と人との關係或は社會的關係に於て見れば、生産と消費とは同一の平面に存立

するものでなく、一は共同的或は集團的或は社會的行動にして、他は常に個人的行動である。かくて社會經濟にありても、獨り消費のみが生産に對して獨特な地位を占め、生産と對立するものとなつて居るので、隨ふて社會經濟の研究は根本的には生産の研究と消費の研究とに大別さる可きである。

然るに今人と人との關係即ち社會的關係に於ては、單に人と自然との關係に於て經濟生活を考察すると、生産も全く個人的に行はれ、生産と消費とは全然同一の平面上に存立して、相關的である、即ち一は他の逆にして、生産にありては人が自然の上に、消費にありては自然が人の上に働くのであることが覺られる。最ども單純なる經濟生活様相にありては、只個人的に行はれる生産と消費が存立するだけである。孤立して生活する原始人にありては、個人的な生産と消費とが經濟生活の全體を構成するので、彼は交換及び分配とは全然無關係である。

併し交換及び分配が行はれる經濟的社會に就ても、吾人若し之を只一の統一體或は單體としてのみ考へる場合には、交換及び分配はさきに述べし如く、全く生産中に包括されるのであるから、結局は只生産(社會的)と消費との二過程に於て、經濟生活の全體は盡きて居ると認めねばならぬ。要するに一の統一體としての經濟的社會は原始人と同様に、其の要する一切の財を自から生産して、自から消費して居るので、交換や分配は只其の生産に隨附する過程に過ぎないのであ

る。

却說以上述べ來りし如く、經濟的生活は其の單に個人的に、即ち單なる人と自然との關係に於て行はれると、社會的に、即ち人と人との關係に於て行はれるとを問はず、結局は生産と消費との二つの過程に於て成立するものとすれば、此處に孤立する原始人經濟生活に於ける生産及び消費にも、亦社會的經濟生活に於ける生産及び消費にも共通する一般的事實及び之を支配する普遍的法則の存立せねばならぬことは明白である。かくて此等の一般的經濟事實及び普遍的經濟法則を研究する理論經濟の第一部門が、先づ成立し得ること、又之を建設せねばならぬことは云ふまでもない。是れ即ち一般經濟學 General Economics と稱せらる可きものである。

只己れ自身の爲めにのみ働く個人の經濟も、孤立して獨生する原始人に就て考へ得られる如く、彼自身の性質と彼の物質的環境の特性とに基いて成立する諸法則に従ふものである。彼は彼が有る如くに有るが故に、又自然は有るが如くあるが故に、彼が生活せんとする以上、彼が従はねばならぬ一定の途があり、又よく生活せんとする以上、存立せねばならぬ一定の諸條件がある。勞働及び資本の內在的生産力は、彼にとつて甚だ重要である。是れ彼は勞働者及び資本家の兩者であるからである。但、彼は吾人が通常勞働と資本との關係と稱するものには、決して關心しない。是れかゝる關係は彼には全く存在しないからである。そうしてかゝる關係の研究は、吾人を直ちに社會經濟の領域に導くのである。併し吾人は全く社會經濟の領域に入らずして、富の一定の普遍的諸法則を研究し得る。否な産業に關する原始的及び一般的事實は、社會的事實が有益に研究され得る爲めに、先づ夫れに先だちて研究されることが必要である。されば經濟學の原理の論述は、政治學及び社會學から獨立に存立して、市場が全く存在せず、各個人が自分の使用する一切の財を自分の勞働によりて作ると云ふが如き、一切の條件中の最とも單純なるものの下に於てきへも明かに示されるほど、一般的なる眞理の一圖を提出することから始めらる可きである。ロビンソン・クルソーの富も、孤獨なエスキモー人の富も、熱帯アフリカのピグミーの富も、歐洲或はアメリカの企業家や株主の富と同様に、一定の法則を有するのである。何處にあつても勞働及び資本の各々の生産力は、一定の一般的法則によつて支配されて居る。其等の法則は文明の總ての階段に於て現はれる程、一般的なものである。そうして之を究明するのが、即ち一般經濟學の任務である。要する一般經濟學は生産の最とも普遍的なる法則及び消費の一切の法則を研究するものである。

然るに社會經濟は單に人と自然との關係に於て成立するものでなく、人と人との關係を基礎として、人と自然との關係に於て成立するものである以上、其の中には一般經濟學の取扱ふ一般的事實以上の事實即ち社會的事實が生起すること、又其等の社會的事實に特有なる法則の存立すべきことは明白である。云ふまでもなく經濟生活に於ける其等の社會的事實は、一般的事實と異なるものであるが、之れと無關係なものでなく、之れに即して生起するものであり、又其等の社會的事實に特有の法則は、一般的法則とは異なつて居るが、之れと無關係のものでなく、之れに即して成立するものである。但し社會的經濟生活の法則は普遍的法則の如く、普遍的なるものではないが、併し最原始的社會から文明の最とも進歩せる社會に至るまで、何れの社會に於ても例證されるほど一般的なるものである。そうして之を普遍的法則から區別して、社會的法則と稱するが適當であると思ふ。かくて此處に一般經濟學以上に、之れに即して理論經濟學の他の一部門が成立し得ること、又建設されねばならぬことは明白である。是れ即ち社會經濟學 (Social Economics) と稱せらる可きものである。

然るに今社會經濟に就て、吾人は先づ其の人口、資本、生産方法、生産組織、慾望等が全く變動せず、そうして自由競争が完全に行はれ、詳しく云へば各産業は完全なる自由を以て進行し、勞働及び資本は絶對的に可動的 (一の企業から他の企業へ自由に移動し得る) であり、人々は一定

の期間の終りには、財の同じ諸種類を、同じ方法を以て、同じ組織の下で、同じ分量に於て生産し、又同じ慾望を充足する爲めに、同じ分量に於て之を消費すると云ふが如き、社會經濟狀態を想像し得る。かゝる社會經濟狀態は即ち靜的社會經濟狀態或は社會經濟靜態と稱し得られるものである。そうしてかゝる社會經濟靜態に於て行はれる分配にありては、先づ社會的產業の生産物の價格は自然的或は正常的即ち靜態的であり、次に勞働及び資本は夫れ夫れ其の特殊的生産力に應じて、社會的產業の生産物を賃銀及び利子として全く吸収することによりて、賃銀及び利子の率は正常的、或は自然的即ち靜態的である。但し靜的狀態に於ては、企業家の利潤は成立し得ないのである。そうして右の如くに想像されたる社會經濟靜態の下で、價格、賃銀及び利子の自然的或は正常的或は靜態的標準を究明するものは、即ち社會經濟學中の一部門として、社會經濟靜學 (Social Economic Statics) と稱せらる可いである。

各時代に於て、靜學的法則が夫れ自身獨立に作用することによりて、社會に於ける經濟的活動の一定の標準的形態及び様相を産出する。併し此の社會的標準型は何れの二時代に於ても同一でない。靜學的法則は不變に存続するが、併し變化する條件に於て作用するのである。一世紀間に生ぜる變化は、社會を一層大ならしめ、一層富ましめ、生産の方法を一層有効ならしめ、總ての階級に對する報酬を一層大ならしめるであらう。賃銀及び利子の標準を設定する靜學的法則は不變に存続するであらうが、併し今活動して居る諸傾向が夫れ夫れ其の自然的結果を生ずるならば、總て其等の報酬或は所得は増大するであらう。是れ恰も水的大量が湖水面の動搖を起し、又之を高めつゝ、其の中に流入しつゝあるが如くである。若し水の流入が止まるならば、水面は一般的平準に靜止するであらう。併し水の流入が再び始まり、百年間も續いて後止まるならば、水面は再び平準に靜止するであらうが、しかも其の平準は以前の平準よりは一層高いであらう。さばれ第一の靜的平準を生ぜる均衡的法則は、第二の平準を生ぜる法則と、全然同じものであるであらう。要するに社會經濟靜學は、文化の各階段に於て作用し、夫れ夫れの各時代に於ける社會を、一の靜的標準型に引きよせる諸原理の一團である。

併し上に述べし如く、靜的狀態は想像的なものにして、一切の自然的社會は動的である。吾々が主として研究す可き社會は殊に甚だ動的である。併し夫れが爲めに靜學的法則は損傷されない。是れ此等の法則は想像的に設定されたるものであるが、しかも現實なる法則であるからである。固定せる形態に於て考へられ、固定せる仕方^に於て常に作用すると見做さる可き世界に於て活動する諸勢力は、變動する實在の世界に於てもヤハリ現實に活動して居るのである。吾々は其等の勢力が他の諸勢力と一緒に活動して居るのを、常に目撃することが出来る。併し吾人は理論的研究に於ては、其等の諸勢力は夫れ自身獨立に活動して居ると想像す可きである。吾人は動的社會に於て進行するもの、一部分をよく理解し得る爲めに、其等の諸勢力を他の諸勢力から切り離して別々に研究するを要する。そうして之を爲すために、吾人は一の靜的社會を想像し、かくて孤立化法 (the isolating method) の大膽な、しかも必要な應用を試みるのである。尙ほ想像的及び靜的狀態が、現實的及び動的狀態に似て居ないのは、是れ只其の省略 爲めのみである。不變的世界に於て働く其等の總ての勢力は、常に變動する現實の世界に於て働いて居るだけでなく、實に此の變動する世界に於ける支配的勢力でさえもあるのである。其等の諸勢力は價格を嚴密に自然的標準に引き留めて居ないが、併し價格が自然的標準からあまり遠ざかることを許さず、其の近傍に上下させ、又現實なる賃銀及び利子を、常に自然率の近くに引きつけて居るので

ある。

され吾人は變動しつゝある現實なる社會經濟を、其の儘に理解する爲めには、靜的諸勢力を研究するだけに止まることが出来ない。更に之れに加へて、進歩の諸勢力、即ち社會が只運動及び動搖の狀態中に投入される時にのみ働く諸勢力を、研究せねばならぬ。そうして此等の諸勢力を究明するものが、即ち社會經濟學の第二の部門、社會經濟動學 (Social Economic Dynamics) である。夫れは社會經濟靜學に於て畫かれたる社會を、現實なる世界の社會に似る狀態に齎すものにして、つまり靜學的理論が明かに又故意に看過するもの、即ち生産の様相を變じ、社會の構造其物に働きかける諸變動其物を究明せんとするのである。

現實なる社會にありては、人口は増加し、隨ふて勞働の供給が増し、生産的富の基本は増大し、生産の方法が改良され、又生産の組織も改良され、更に消費者の慾望が變化して居る。併し此等の變化の何れも靜的諸勢力の作用を抑止するのてなく、又總ての變化が相合しても、尙ほ之を抑止することが出来ない。つまり動的諸勢力が靜的諸勢力と結び附いて働き、そうして兩者の合成果として、現實なる價格、賃銀及び利子が決定されて居るのである。かくて動的現象の研究に進むに於て、經濟學理論は完成され、事實の世界を充分に解釋することが出来るのである。そうして理論的な動的な世界は、若し之を構成する理論が眞實な完全なものであるならば、精密に現實な世界に似るのである。夫れは實業家が、理論的結論を誤らしめる。譬として指摘する、擾亂及び摩擦の諸要素を、充分に考慮して構設されたる世界である。若しかゝる理論的動的な世界の研究が完成されるならば、是れまで缺けて居る學問、即ち經濟的摩擦及び擾亂の科學が呈供されるであらう。

今社會經濟動學は、其の方法に於ては演繹法を用ひねばならぬ。夫れは全く理論的な社會經濟靜學の結論を基礎とせねばならぬ。しかも現實主義は社會經濟動學の著しき特徴である。競争が自由に行はれる世界の總ての部分の市場に於て、物價、賃銀及び利子等の自然的標準は靜的諸

勢力によりて產出されるが、其の自然的標準を上下する動搖或は變動は、動的諸勢力によりて產出される。そうして其の動搖或は變動は、靜的諸勢力の性質、及び只其等の勢力のみが働く場合に生ずる自然的標準が、先づ知られるに非らずば測定し得られないが、しかも其の動搖其物は現實なる經濟的事實として、認識されることが肝要であつて、夫れは只動的諸勢力の研究によりてのみ認識し得られるのである。尙ほ社會經濟動學の重大なる意義は、動的諸勢力は靜的諸勢力の働く新しき條件を創造すると云ふことに於て認められる。此等の新しき條件に於ては、自然的價格、賃銀、利子等は、以前の條件に於てありしとは異なつてくる。何れの一定期間に於ても、靜的諸勢力によりて設定されたる價格、賃銀、利子等の、夫れ夫れの一標準が存立し、そうして其の期間内に於て、其等の標準に對して現はれる現實なる率の一時的動搖は、動的諸原因から生起するものである。併し後の期間に於ては、其等の標準其物が變化を受けて居る。そうして此の重大なる結果は、動的諸勢力の作用に歸せらる可き、最も重要なものである。要するに社會經濟動學は擾亂及び變易の理論を含むものとして重要な意義を有するが、併し其の中に含む最も重要なものは進歩の理論である。

以上論じ來れる處によりて考ふれば、經濟學の第一部門として、先づ富の普遍的現象を對象とし、富の獲得過程及び使用過程の普遍的法則を究明することを、認識目的とする一般經濟學が成

立し、次に經濟學の第二部門として、社會が編制され、そして其の編制の形態や、其の活動の様相に於て、何等の變化も起らないとすれば、富に關して更に如何なる現象が現はれるか、又其の一般的法則は如何なるものであるかを研究する社會經濟靜學が存立し、終りに經濟學の第三部門として、社會が其の形式及び活動様相に於て變化しつゝあると云ふ理由によりて、社會の富及び安寧に關して、更に如何なる事態が生ずるか、又其の法則は如何なるものであるかを考究する、社會經濟動學が成立するのである。そして經濟學を右の如き三部門に別つて考へると、經濟動學によりて呈出される新研究の分野は、無定限に豐沃なるものであることが覺られる。尙ほ經濟動學の取扱ふ問題は、本質的に新しき問題である。と云ふのは今日まで經濟學は一般に此等の問題を切り離し、獨立なる問題として明亮に把捉し、又之を解決する爲めの材料を蒐集しなかつたからである。從來の經濟學も決して進歩を考慮して居なかつたのではないが、併し進歩が呈出する諸問題を正當に解決し得る地位に達して居ない。是れ經濟靜學的法則の知識が、經濟動學的法則の知識の準備として、何れの場合にも普遍的に必要なことを覺らず、かくて經濟靜學を經濟動學とを區別し、先づ經濟靜學の確立に力を注がなかつたからである。力學に於て見られる如く、靜止の諸勢力は、運動の諸勢力が理解される前に、知られなければならないのである。但しクラークは最密に云へば經濟學を原始經濟の靜學と動學、及び社會經濟の靜學と動學との四部門に分たんとするのがあるが、併し動的社會的産業の法則を理解せんとする目的から見れば、原始經濟の靜學と社會經濟の靜學及び動學の三者

が特に肝要であると考へ、かくて經濟學を上述べし如く三部門に別つて居るのである。そうして原始經濟の靜學を一般經濟學と稱して居るのであるから、彼が單に經濟靜學及び經濟動學と稱して居るのは、社會經濟靜學及び社會經濟動學を意味するものである。

却說クラークの經濟學方法論の要は、以上述べしが如きものであるが、今之を批判的に評價せんとするに當つては、吾人は更に彼の經濟學の實質的内容を考察せねばならぬ。即ち彼が一般經濟學と稱するもの、認識目標と見る普遍的經濟法則とは實質的に如何なるものであるか、又彼が經濟靜學と稱するもの、認識目標と見る靜學的經濟法則とは、實質的に如何なるものであるか、又彼が經濟動學と稱するもの、認識目標と見る動學的經濟法則とは、實質的に如何なるものであるか等の諸問題を考察せねばならぬ。是れ上に述べし處によりて知られる如く、彼は先づ理論經濟學は經濟現象の自然法則を究明する科學であると見た上で、其等の自然法則即ち經濟法則を根本的に三種に大別し、そうして夫れに基いて理論經濟學を根本的に三部門に大別して居るからである。かくて私は只彼の方法論を批判することを目的とするのであるが、しかも彼の方法論を充分に理解する爲めに、更に彼の經濟學の實質的内容を少なくも、一般的に考察して置かねばならぬ。それで私は是より先づ彼の一般經濟學、社會經濟靜學及び社會經濟動學の夫れ夫れの根本原理、即ち彼が普遍的經濟法則、靜學的經濟法則及び動學的經濟法則と稱するもの、主要なるものを、簡單に説述することゝする。

(三) クラークの一般經濟學の根本原理——主要なる普遍的經濟法則

クラークはさきに述べし如く、一般經濟學は人間の經濟生活に關する一般的事實を對象として、普遍的經濟法則を究明するものと認めるのである。そうして彼が一般的經濟事實及び普遍的經濟法則と稱するものは、つまり人間が富を生産し消費する處では、何處にありても現はれる事實及び其の法則にして、人間が社會を構成して居るや否やに關係ない。夫れは分業や交換の組織を前提せず、否な何等の社會的編制も前提しない。かくて一般經濟學は其の何れの前提をも社會學から借用せず、そうして其の基本的事實を只物理學、化學、生物學、心理學等より引き出すのである。要するに一般經濟學は人と、自然と、兩者の關係に關する事實を、其の材料となし、富の生産及び消費に關する、人と自然との關係の普遍的法則を究明せんとするものである。そしてクラークが主要なる普遍的經濟法則と見るものを列擧すれば左の如くであると思ふ。

(一) 消費者富或は消費者財の連續的諸單位の効用漸減の法則 消費者財とは直接に慾望を充足する財である。今物が人間の慾望を充足する形質は効用である。
が、併し物が只効用を有すると云ふだけで、まだ富の一形態或は經濟上で云ふ財とはならないので、夫れが爲めには、効用を有する物の供給量が制限されたものであらねばならぬ。かくて効用物或は有用物の有限供給量の特殊の各小量が、夫れ夫れ一定の或重要性を有することになる。そうして此處に吾人は効用に二種あるを學ぶ。其の一は供給量の有限なる一無限なるかを問はず、物が有する効用にして、絕對的効用と稱せられる可きもの、其の二は供給量の有限なる物が、其の特殊の各小量に於て有す

る効用或は重要性にして、實効的効用 (effective utility) と稱せらる可きものである。有用物は其の供給量が無限である時、其の絶對的効用を有するが、併し只其の供給量が有限にして、其の特殊的小量が或重要性即ち特殊的重要性 (specific importance) を有する時にのみ、實効的効用を有するのである。然るに今有用物の供給量が多數の單位に區別されて消費者に一單位づつ順次に與へられると見ると、各單位の實効的効用に大小の差が生ずる。そうして最初の單位の實効的効用は、夫れに次いで與へられる何れの單位の實効的効用よりも大なるものにして、又第二の單位の實効的効用もやへり夫れに次いで與へられる何れの單位の實効的効用よりも大であると云ふ様に、後に與へられる單位ほど、其の實効的効用が漸次に減少して行く。かくて最後の單位は其の實効的効用或は特殊的重要性が最も小なるものとなるが、かくる最後の單位の實効的効用は最終効用 (final utility) 又は限界効用と稱せられるのである。そうして右の如くに消費者財の連續的諸單位の効用が順次に漸減すると云ふことは、最も根本的な普遍的經濟法則の一である。

(二) 消費者財の價值決定の法則

上に述べし如く最後に獲得する單位の實効的効用即ち限界効用は、既に吾人の獲得せる全單位の實効的効用の中で最小のものであるが、然るに吾人が既に獲得せる全單位中の何れの一を失ふ場合にも、其の際に吾人の損失する實効的効用は、限界効用と同等のものである。かくて全單位の實効的効用は夫れ夫れ大小相異なつて居るに拘らず、其の何れの一に對して認める特殊的重要性も、限界効用に認める特殊的重要性と同等である。そうして財の價值とは、吾人が夫れの一定量に認める重要性の度合を意味するものであるから、其の一定量が幾多の單位から成立するものと見る場合には、其の一定量の價值は最後に獲得されたる單位の限界効用を、全單位の數で乘じたるものに均しいことが覺られる。要する財の一定量の價值は、其の一定量が幾多の單位に分たれて順次に獲得されたと見れば、最後の單位の限界効用によりて決定されるので、全單位の夫れ夫れの實効的効用の總計即ち總體効用 (total utility) によりて決定されるのである。かくて吾人が獲得せる財の一定量から受ける總體効用は、其の一定量に認める價值、即ち限界効用に全單位數を乘じたる効用の總計よりも遙かに大なるものである。

(三) 生産者富或は生産者財或は資本財の連續的諸單位の生産力漸減の法則及び資本財の價值決定

消費者財は直接効用即ち直接に消費者に役立つ力を有する財であるが、生産者財或は生産要具或は資本財は、間接効用の法則、即ち直接に役立つ財の生産を助ける力、つまり生産力を有する財である。但し資本と資本財とを區別することは甚だ肝要である。(此の區別は特にクラークの創見として有名なものである。) 要するに資本財は生産によりて早晩破壊され、消耗し、新たに取り代へられねばならぬものであるが、併し資本は生産の存続する以上、永續するものにして、永續性は資本の本質的特性である。かくて資本は生産的財の永續的基本にして、此の永續的基本の常に變化しつゝある構成的要素或は部分が、資本財である。併し資本は現實には決して資本財を離れて存立するものでなく、新陳代謝しつゝある資本財に於て、常に具現して居るものである。つまり消費者財の生産に於ける労働の共力者及び其の永久的助力者として、生産の永久的一要因であり、そして本來可減的な常に變化しつゝある資本財に於て、常に具現して居るものか、即ち資本である。然らば生産者財或は資本財の

生産力は、如何にして測定する可きかと云へば、夫れはつまり生産的目的に對する其の價值を決定することに於て、測定する可きである。そうして此の測定は消費財の効用の測定に於けると同じく、ヤハリ資本財或は生産具の連續的諸單位に就て行はる可きである。例へば鋏、用ひて馬鈴薯を掘るとすれば、其の供給量の一部は、鋏の効力或は生産力に歸するのである。併し此の際用ひられたる幾挺かの鋏の生産力を測定せんとするに當つては、吾人は其等の鋏が全く用ひられたかつたとすれば、如何程不利益であるかを見定めんとす可きでなく、若し其の中の何れかの一挺が失はれたとすると、吾人の受ける不利益は如何程であるか、又は失はれたる一挺が見出されたとすると、夫れによりて得られる利益は如何程であるかを測定する可きである。つまり用ひられたる幾挺かの鋏が、一挺づつ加へられて行くとすれば、各一挺の實効的或は特殊的生产力は夫れ夫れ如何程であるか、かくて最後の一挺の實効的或は特殊的生产力は如何程であるかを、見定める可きである。そうしてかくの如く資本財或は生産具が一單位づつ順次に與へられて行くとして考察すると、各單位の實効的或は特殊的生产力は順次に減少し、最後の一單位の夫れ、即ち最終生産力或は限界生産力は最小であることが發見されるのである。かくて資本財の生産力の價值或は重要性は、消費財に於けると同じく、最終生産力或は限界生産力によりて決定されるのである。

(四) 勞働の連續的諸期間の費用(或は犠牲)漸増の法則、或は勞働の連續的諸期間の苦痛漸増の法則

生産に適用される勞働も、短き期間單位或は時間單位に於て、順次に連續的に遂成されるものと見ると、始めの諸單位に於ては苦痛或は費用或は犠牲が全く感じられないのみならず、却て快樂が感じられる。併し順次に單位を連續的に加へて行くと、各單位の特殊の費用或は苦痛は漸次に増大して行く。かくて一日の勞働の最後の一時間の勞働は、其の特殊の費用或は苦痛の最大なるものであり、一日の勞働時間の短縮は漸次に終りの各單位の特殊の苦痛或は犠牲を減少し行くのである。

(五) 特殊の費用或は苦痛と、特殊の或は實効的効用との關係の法則

要なる原理が働いて居る。即ち一方に於ては彼が獲得する消費財の分量が増すほど、其の財の連續的諸單位の特殊の重要性或は實効的効用は漸次に減少し、他方に於ては、其等の連續的諸單位の特殊の費用或は苦痛は、漸次に増大するのである。今或人が食物を生産する爲めに勞働するとすると、第十時間目の勞働は確かに食物の供給量を増すが、併し其の増分は、彼が既に有する供給量ほど重要でない。吾人若し其の供給量を十分し、連續的の各一時間毎に其の十分の一づつが生産されると假定すると、

最初の十分の一は其の人を飢餓から救ふのであるから、最も重要なものである。併し最後の十分の一は、彼の食慾の飽滿點に接近するものであるから、其の重要性の最も小なるものである。しかも此の最後の十分の一増分は、最大の費用或は犠牲によりて生産されたものである。是れ勞働日を九時間から、十時間に延長することによりて生産されたものであるからである。そうして人若し最後の十時間目の勞働の最大特殊の費用或は犠牲が、最後の十分の一増分が與へる最小特殊の効用即ち最終効用或は限界効用によりて適當に報ひられないと考へる時は、最後の十時間目の勞働を停止する。併し彼が敢て第十時間目の勞働を行ふならば、是れ彼は夫れによりて得られる増分の最小特殊の効用即ち限界効用が、夫れによりて受くる最大特殊の費用或

は犧牲を丁度償ふて居ると見定めるからである。要するに人間は其の生産的勞働に於て、常に右の二種の測定を行ない、そうして費用或は犧牲の極大量と、効用の極少量とか相平均する點、或は均衡を保つ點を見出し、此の點に於て價值を測定するのである。是れ原始生活に於ても、亦社會生活に於ても、根本的には、普遍的に行はれて居る價值決定の法則である。

クラークが一般經濟學の主要なる普遍的經濟法則として設定せんとするものは、以上述べしが如きものである。されば吾人がクラークの一般經濟學概念を方法論的に批判せんとするに當つては、彼が普遍的經濟法則と稱する右の如きものは、果して彼の確信するが如き普遍的な自然法則であるや否やを吟味せねばならない。併し夫れに先だちて私は、更に彼が社會經濟靜學及び動學の根本原理或は根本法則と認めるものは、如何なるものであるかを簡單に説述し、其の後に彼の經濟法則の全體を包括的に批判したいと思ふ。

(四) クラークの經濟靜學の根本原理——靜學的

經濟法則

さきに述べし如く、クラークは社會經濟學を經濟靜學と經濟動學とに大別し、そうしてあるがまゝの現實なる經濟生活は本來動的なものであるから、之を究明するものは經濟動學であらねばならぬと見て、經濟動學を大に重要視するが、併し科學方法論上から考ふれば、經濟動學は只經濟靜學を基礎としてのみ建設され得るものであるから、科學として經濟學を大成する爲めには、

先づ經濟靜學を建設することが、根本的に肝要であると確信して、専ら夫れに力を注ぎ、彼の名著「富の分配」を公にしたので、そうして少なくとも彼の主旨から見れば、彼は「富の分配」に於て、經濟靜學建設の目的を大體上成就したと云ひ得られる。されば其の後彼は經濟動學の研究に力を盡くし、經濟靜學に於ける「富の分配」に比敵する經濟動學上の著作を公にせんと努めて居たが、併し「經濟學理論の眞髓」の過半部分に於て見るが如きものしか成就し得なかつた。もつとも同書に於ける彼の經濟動學の研究は、經濟動學の研究としては、歐洲經濟學者の何れの研究にも劣れるものでない。しかも經濟動學の問題は、單に經濟靜學の問題よりも遙かに複雑であると云ふだけでなく、其の性質を異にするものにして、隨ふて後者の如く自然科學的に研究し得られないものであるから、クラークも科學的研究を自然科學的研究と同一視する以上、後者の研究に於て成功せるほど、前者の研究に於て成功し得なかつたのは、敢て怪むに足らぬ。此の事に就ては後に詳しく論ずるが、要するにクラークの經濟學上の成業は、主として經濟靜學の方面に於て評價される可きであると思ふ。

却說クラークが經濟靜學の對象とし 設定する社會經濟靜態なるものは、さきに述べし如く、想像的或は假設的構想物であるが、然らば夫れは如何に思想的に構成されて居るか云ふに、要するに夫れはつまり人間と自然との經濟的關係を支配する普遍的經經法則が、人間と人間との關

係から生ずる社會組織の下で、且つ其の社會組織が一定不變であるを假定される場合に、完全に實現される經濟生活狀態として構想されたるものであると思はれる。更に詳しく分析すると、彼の社會經濟靜態なるものは、左の諸要素の假定によりて構想されて居ることが覺られる。即ち一定の靜的人性（人間は常に苦痛を避けて快樂を求め、苦痛の最小量を以て快樂の最大量を得んとする性質を、本來具有するが故に、彼の經濟學は快樂主義經濟學の一種と見做され、そうしてかゝる粗朴な心理學說を基礎とするものとして後に述べる如く、新心理學的經濟學によりて大に非難されて居るのである。）財の可分性、社會制度の固定、生産方法及び生産編制の固定、人口の固定、完全なる自由契約、完全なる自由競争、完全なる市場、勞働及び資本の完全なる移動性、需要供給の完全なる平均等の諸假定。そうしてクラークは右の如き假定的諸要素によりて構成された經濟靜態に於ては、價值或は價格は限界効用によりて決定され、賃銀は勞働の限界生産力によりて決定され、利子は資本の限界生産力によりて決定されるので、是れ即ち價值或は價格の自然法則、賃銀の自然法則及び利子の自然法則である。但しさきにも述べし如く、クラークは經濟靜態に於ては、企業家の利潤は成立せず、又土地は資本財の一種と見做さる可きものにして、隨ふて地代は獨立なる所得部類をなさないと考へるのである。併し彼は經濟動態に於ては企業家の利潤を重要視し、又土地が他の資本財から區別される其の不滅性を重要視して居る。

尙ほクラークは地代が、賃銀、利子及び利潤等より區別される特別なる所得の一種として、一般に經濟學上取扱はれて居るのは、特定の歴史的事情によるものとして、「經濟學理論の眞髓」中に左の如く述べて居る。

「經濟學は勞働の直接の傭主が、一般に多くの土地の所有者でない國（英國）に於て始めて形成されたので、其の國に於ては農業者、商業者及び多くの製造業者は土地を借用し、そうして只之を利用する爲めに必要なる補助資本のみを自から呈供したのである。かくて實際に於て土地の所得は其等の人々とは異なる人々の階級に歸したから、夫れは他の諸形態の資本の所得から分離され、そうして人々の思想に於ては、只土地の使用に對してのみ拂はれる代金は、所得の特異なる一種として考へられるに至つたのである。若し前世紀間に英國に於ける土地が、商品とし盛んに取扱はれるものであり、又土地を借用するのでなく、他の總ての産業的要具と同様に、之を買ひ入れて所有するのが、企業家の常慣習であつたならば、土地が實際的考慮に於て又は科學に於て、他の總ての資本財から、今日まで爲された居る様に廣く區別されるものとして考へられる蓋然性は、殆んどなかつたであらうと思はれる。企業家は彼の資本の永續的基本をボンドに於て計算し、そうして彼が土地に投下せるものをも、總て其のボンド總額中に含めるであらう。……」

以上述べし處によりて考ふれば、クラークの經濟靜學の根本原理或は根本法則と認む可きものは三つあると思はれるので、其の一は價值或は價格は限界効用によりて決定されると云ふ原理或は法則、其の二は賃銀は勞働の限界生産力によりて決定されると云ふ原理或は法則、其の三は利子は資本の限界生産力によりて決定されると云ふ原理或は法則である。そうして彼は「富の分配」に於て、經濟靜態の下に於て、價格は如何にして限界効用によりて決定されるか、又賃銀は如何にして限界生産力によりて決定されるか、又利子は如何にして限界生産力によりて決定されるかを詳しく論證せんと企だてゝ居るのであるが、此處に詳述する暇はないから、同書を閱讀されたい。

(五) クラークの經濟動學の根本原理——動學的經濟法則

前節に述べし如くクラークは假想的經濟靜態を構想して、靜學的經濟法則を設定したのであるが、併し經濟靜態も亦靜學的經濟法則も、只假說的價值しか有しないものと見るのではなく、經濟靜態は社會的經濟の本體、又靜學的經濟法則は社會的經濟法則の眞髓にして、常に變動しつつある現實なる經濟動態中に現實に生動し、又之を支配するものであると考へるのである。かくて彼は經濟動態は、つまり種々なる諸勢力によりて攪亂される經濟靜態に外ならぬものにして、そして常に經濟靜態に歸着せんとする傾向を有し、又動學的經濟法則は經濟靜態が攪亂されることによりて生ずる、靜學的經濟法則の歪み或は偏斜に外ならぬものと、見て居ると思はれる。併し彼は種々なる諸勢力によりて攪亂されたる一の經濟靜態が、早晚歸着せんとする他の經濟靜態は、其の實質的内容に於て一層高等なるものにして、かくの如くにして進歩が實現されるのであると考へて居る。かくてクラークの進歩の概念は、要するに種々なる諸勢力によりて攪亂されることによりて、益々其の實質的内容の高まり行く經濟靜態の斷續的發展を意味するものであると思ふ。そうして彼は其等の經濟靜態を攪亂する諸勢力は如何なるものであるかを研究し、又如何にして其等の諸勢力が經濟靜態の實質的内容を高め行くか、即ち進歩が實現され行くかを究明して、以て動學的經濟法則を發見し或は設定するのが、經濟動學的任務であると考へるのである。

クラークが經濟靜態或は靜的均衡を攪亂する諸勢力及び動學的經濟法則に就て論究して居るこ

と(「經濟學理論の眞髓」第十二章——第三十章)は甚だ複雑にして、簡單に其の大意を述べることも此處では困難であるから、只彼が最も重要視する五種の一般的勢力或は變化に就て、極簡單に述べ、彼が經濟動態及び其の法則と見るものは、現實には如何なるものであるかを、一般的に指示するに止める。

(1) 人口の増長

人口の増長は勞働の供給を増大するが、此の事實だけで産業部類體系の新しい整理が常に要求される。

(2) 資本の増加

資本總額の増加も亦、靜的均衡を攪亂し、其の新しい整理を要求する。併し賃銀及び利子に關する以上は、此の變化は勞働の變化に伴なふ變化とは正反對のものである。人口が増加すれば、他の事柄が變らぬとすると、各人の儲ける個人的能力は減少する。然るに資本の増加は資本の各供給單位の儲ける能力を減少して、利子の率を低下するが、賃銀の率を高める。是れ資本の増加は勞働をしてより有効に働かせるに至るからである。此處に注意すべきは、新しい勞働者が増す時は、生産者の數が増すと共に、又消費者の數も増し、そうして此の事が財の効用及び價格に影響することである。消費者財の與へられたる總額を、より多くの人々が消費する時は、効用或は不効用に於て測定される價格は騰貴する。そうして資本の増加は、消費者の數を變化しないから、右の結果を中和しないが、併し財を増加して、其の効用及び價格を低下する。勞働者の増加に伴なふ「主觀的」價值の上騰は、一人當り富の減少を指示し、資本の増加に伴なふ價格の下落は一人當り富の増大の徴候である。

(3) 生産方法の變化

新しい製造法が工夫され、改良されたる器械が發明され、廉價な動力が利用され、低廉な原料が発見され、是れ此の際一種の適者殘存の法則が行はれるからである。

競争の下に於ては、勞働及び資本の一定額を以て、より多くの生産物を產出する製造法は、より少なき生産物を產出する製造法を必然的に押し退け、よりよき方法を用ひる企業家は、劣れる企業家よりも安く賣りて、彼等をして自分の方法を改良するか、然らずば廢業するに至らしめる。されば働いて居る人類は全體としては、人間が自然との闘争に於て益々有効に活動し、益々迅速に又完全に之を征服し得る様、設備及び裝置が改良されるにつれて、絶へず生産力を増大して居るのである。そうして其等の生産方法の改良は、賃銀の上に只善い結果のみを生ず可き筈と思はれるが、結局必ずかゝる結果を生じて居るのである。生産方法の改良が行はれねば、勞働者の將來は望みなきものであらう。云ふまでもなく個々の勞働者に於ける生産方法改良の直接

結果は、常に無條件的に善いのではない。併し其の一般的及び永久的結果の性質は、吾人之を疑ふには過去の經驗はあまりに充分に證明して居る。勞働人類の將來の望みの根據は、生産方法の改良に存する。今日の勞働の儲ける力の殆んど全體は、過去の改良の結果である。もつとも夫れは地方的及び一時的困難を生ぜずには收め得られたのではない。そうして今日に始まり遠い將來にも及ぶと思はれる生産方法改良の連續は、勞働の賃銀を他日二倍或は四倍に増すとしても、此の進歩は決して無代價で實現され得ない。其の代價或は苦痛は過去の改良に伴なへるものより小なるものではあらうが、しかし確かに現實に拂はれ或は嘗めらる可きものであらう。但し此處に注意すべき最も重要な事實は、其等の代價或は苦痛は益々減少する傾向を有し、そうして收め得られる利益は無限に之を超過すると云ふことである。

(4) 生産編制に於ける變化

商品が生産される工場を編制する仕方の變化も亦重要である。そうして夫れが競争制度の下り、又比較的に小數となる。是れ即ち大工場は小工場よりも、其の製品を安く賣りて小工場を壓倒し、合同が多數の工場を同一の管理の下に糾合することによりて、今日進行しつつある一大集中化運動である。そうして此の運動が完全に順當なる仕方に於て行はれる時は、産業方法の改良と同様な結果を生ずる。夫れは如何程か個人の利益を害するが、全體としては社會の利益を増し、人々の富創造力を絶へず増大することによりて、賃銀を上騰させる。併し企業合同が競争を壓迫する時は、其の結果は決して完全には有益であると云はれない。夫れによりて常に個人の利益が傷害されるのみならず、全體としての社會も重大なる害を受ける。そうしてかゝる害を避けて、企業合同から生ずる利益を確保することは、實に將來の政治家が奮闘努力して實現すべき目的の一である。

(5) 消費者の慾望に於ける變化

消費者の慾望は變化し、其の數が増すと共に、又其の質が精練され、又知的となりつは當面には獲得し得ない或物に對する慾望を有し、社會全體は現實なる慾望滿足の限界を超へて、しかも之れに近接する幾多の充足されて居ない慾望を有するからである。尙ほ此等の慾望が充足されたとすると、更に夫れ以上に慾望は發達する。人々の教育が別に進歩せずとも、只單に儲ける力が増大したと云ふだけで、慾望は増すのであるが、更に教育の進歩によりて人々が精神的に發達することは、大に慾望の多樣化(diversification)を促がし、又潜在的慾望を現實化させる。そうして此の種の諸變化は價格に影響し、勞働及び資本を一の産業部類より他の産業部類へ移動させ、かくて社會全體をして或種の財の生産を減じ、他の種の財の生産を増すに至らしめる。尙ほ時として全然新しき産業部類を發達させ、勞働者及び設備を在來の産業部類より、之れに移轉させるに至る。そうして此處に慾望の多樣化の甚だ顯著なる一結果として特に注目すべきは、夫れは與へられたる勞働の一定の使用高を以て生産されたる貨物の一定の總量の集合的効用或は總體的効用を、益々増大すると云ふことである。

却說今日の文明國に於て進行しつつある處の、以上述べし總ての主要なる變化の大合成果は、

賃銀が實に其の現實なる率に於てのみならず、更に其の理論的標準に於ても、絶へず高まつて居ると云ふことである。今日の勞働に對する靜的或は「自然的」率は、五十年前よりも高く、又五十年後に當然あるであらうと思はれるよりも低い。一切の攪亂的諸影響を除去して、今日の社會を一の完全なる靜的狀態に安定させるとすると、現在の賃銀の理論的標準が啓示されるであらう。又同じ事を五十年後に行なふとすると、其の時には自然的賃銀率或は標準賃銀率が、如何にあるであらうかは、學ばれるであらう。そうして夫れは現在の率よりも高いであらう。各期間後、實に現實なる賃銀が高まるのみならず、夫れが合致す可く向ふて居る標準も亦高まるであらう。何れの時期に於ても、賃銀の現實率は標準率から差違する。併し兩者共に一定期間毎に高まり行き、そうして現實率は其の間、標準率からの一定の距離内を上下するのである。

同じ仕方にて、勞働に於て測定される財の價格は、一般に低下するであらう。何れの時期に於ても現實なる市價は、諸種の貨物を生産する爲めに要する限界勞働の總計を精密には表示しないであらうが、併し接近的には之を表示するであらう。市場に於ては諸種の貨物は、勞働が限界勞働として使用される時に、之を生産する高に應じて、勞働に報ゆる程の價格で販賣され、そうして與へられたる一の貨物に投せられたる此の勞働の高は段々に減少するから、貨物の價格は現實には段々により少なき勞働時間を償ふものとなるであらう。何れの貨物の標準價格も、一定の條

件の下で考ふれば、之を生産する勞働を償ふに必要な貨幣高であるであらう。貨幣に於て拂はれる賃銀は變動せずに止まることも、正常價格は下落し、そうして現實價格は夫れに伴なふ下落に於て、正常價格の周圍を彷徨し、かくて財貨は現實には勞働の益々減少する高を購買するものとなるであらう、換言すれば勞働は其の報酬として益々多くの財貨を獲得するであらう。

以上クラークの經濟動學に就て述べしことは、只其の不完全なる理解しか讀者に與へ得ないかも知れないが、此處では詳しく述べる紙面はないから已を得ない。併し夫れによりてクラークの動學的經濟法則の論理的性質は、大體上如何なるものであるかは明かに理解されるところ。

(六) クラーク限界經濟學の方法論的批判一般

私は本論文「緒言」中に述べし如く、限界經濟學者は一般にあまり數學式を用ひないから、數學的經濟學者から區別されて居るが、併し本來其の考へ方は根本的には數學的であつて、方法論上から考察するに於ては、限界經濟學の批判は結局數學的經濟學の批判に歸着す可きものと考へて居るのである。それで私は次に數學的經濟學の根本原理を考察したる後に、其の方法論的批判の中に含めて限界經濟學を方法論上徹底的に批判したいと思ふ。かくて私は此處では限界經濟學の方法論的批判を組織的に論述せず、只クラークの經濟學に就て以上述べ來りし事に關して、方法

論上特に注意す可き諸點に就て、簡單に論述するに止める。

本論文(一中)に述べし如く、クラークは其の最初の著作「富の哲學」にありては、一方に於ては古典學派の自然科學的見地を固持しながら、他方に於ては獨逸歴史派の倫理的見地を取り入れ、又夫れによりて古典經濟學を改造せんと企だてゝ居る。併し方法論的に嚴密に考ふれば、此等の二見地を併合或は混合して、一の學問を建設せんとすることは到底不可能である。殊に倫理的見地に基いて一科學を建設せんとすることは、全く不可能である。(但し倫理的見地に就いて建設されるものは哲學的學科にして、科學ではない。)さればこそクラークは其の後研究が進み、方法論的に最初の粗雜な見解を精練するにつれて、理論經濟學に於て先づ自然科學的見地に基いて成立する一部門として、一般經濟學を建設し、次に社會經濟に就て、やはり自然科學的見地に基いて成立する理論經濟學の第二の部門として、種々なる假定的條件によりて構成される社會經濟靜態を想像し、其の自然的經濟法則を研究する經濟靜學を建設し、終りに現實なる社會經濟動態を、前二部門の自然的經濟法則を基礎として、倫理的見地から考察する經濟動學を、理論經濟學の第三の部門として建設せんと、企てられたのであると思ふ。併し實際に於ては當に彼の經濟動學のみならず、彼の經濟學全體を通じて、第十九世紀に於ける資本の増長、賃銀の上騰、及び人道主義、民主的理想、一般的知識啓發等の普及を反射する樂天主義、即ち一定の倫理的見地が支

配して居るので、後に述べる如く、制度主義の經濟學者が彼の經濟學は宇宙精靈主義的（經濟的宇宙は一見「見られざる手」によりて、人間の目的と調和する様、導かれて居ると云ふ信仰を意味する）」で、快樂主義的で、目的論的であると評して居る程である。

されば詳しく吟味して見ると、彼が經濟生活の自然法則と考へて居るものは、決して純粹なる自然法則でないことが發見されるのである。
（本雜誌昨年四月號掲載「總合社會學概念」
 (2)「トレールチの總合社會學排斥論」參考。）

今クラークの經濟學を支配すると思はれる倫理的・目的論的見地は、先づ彼の經濟動學に於て最も明瞭に認め得られるから、便宜上彼の經濟動學から考察し始めるが、要するに彼が動學的經濟法則と考へるものは、さきに述べし處によりて察知される如く、根本的には目的論的必然性を意味する一定の規範を、因果的必然性を意味する普遍的法則即ち自然法則の形式に於て言述するものに外ならぬと思はれる。此處に此の事を一々論證する暇はないが、讀者自からクラークの動學的經濟法則に就て考察されるれば、明かに理解されるであらうと思ふ。かくて彼の經濟動學なるものは、根本的には哲學的一學科或は歴史哲學的一學科に外ならぬものにして、決して自然科学的一學科ではないのである。

然らばクラークが靜學的經濟法則と稱するものは、果して彼の考へるが如き自然法則であるかに云ふに、彼は靜學的經濟法則を立てる爲めに、如何に現實なる經濟生活に種々なる細工を加へ、多數の假定に基いて經濟靜態を構想或は想像したかは、さきに彼の經濟靜學に就て述べし處

によりて指示したが、要するに彼は社會經濟的自然法則を發見或は想定する爲めに、詳しく云へば價格が限界效用によりて、又賃銀が勞働の限界生産力によりて、又利子が資本の限界生産力によりて決定されると云ふ法則を立てる爲めに、夫れに都合惡き現實なるあらゆる事情を除去し、又夫れに都合良きあらゆる條件を假定したのである。そうして彼の假想するが如き經濟靜態の下にありては、彼の價格、賃銀及び利子の法則は、必然的に行はねばならぬ自然法則であるが如く考へられる。併し此處に注意すべきは、彼は先づ彼の假想するが如き經濟靜態を構想し、然る後に其の狀態の下に於ては、如何なる自然法則が行はれるかを發見せんとしたのでなく、寧ろ先づ彼の價格、賃銀及び利子の法則を想定し、然るに後にかゝる法則が必然的に行はれる經濟狀態を構想したのであらうと思はれることである。此の事は彼の最初の著作「富の哲學」を熟讀し、其の後の諸論文を精究すると、大體上想像し得られると思ふ。然らば彼は何故に先づかゝる經濟法則を想定せんとしたかと云ふに、夫れはつまり勞資問題を根本的に解決する理論的原理を確立せんが爲めであるかと思はれるので、そうして此の事は彼の名著「富の分配」の緒言中の最初の文章（本書の目的は、つまり社會の所得の分配は一の自然法則によりて支配され、そうして此の法則は、若し摩擦なしに行はれるならば、生産の各因素に夫れが創造する富の總額を與へるであらう）によりても推察される。かくてクラークが自然法則と信ずる靜學的經濟法則も、方法論上

嚴密に自然法則と稱せられるものと異つて、少なくとも其の裏面に倫理的意義を多分に含蓄して居る。極言すれば夫れはつまり一定の倫理的理想を自然法則の形式にて言述するものであるとも、云ひ得られるかと思ふ。要するに彼が自然法則であると信する靜學的經濟法則も、決して嚴密に云ふ自然法則でなく、少なくとも倫理的背景を有するものにして、あるがまゝで自然的必然的普遍的に妥當するものではない。かくて今日では限界經濟學者自身も、其等の經濟法則はつまり一定の一般的傾向を意味するだけのもので、決して嚴密に云ふ自然法則ではないと考へて居るのである。尙ほ此處に注意して置きたいことは、若しクラークが賃銀の法則と認めるが如きものが自然法則であるならば、彼が本質的には其の普遍的必然的結果と信するもの、即ち賃銀の上騰を、必然的には生じないと云ふことである。是れ彼の考へるが如き勞働の限界生産力の生産高は、只勞働者の物質的生活を漸くに支へ得るだけのものであり得るからである。必ず只夫れだけのものであらねばならないので、クラークの賃銀法則はつまりラッサルの賃銀鐵則を、新しき廻りくどい形式にて言述するものに過ぎないと評する人々の意見は、適切でないとするも、其の作用するがまゝに放任すれば、かゝる結果を生じ得ることは疑はれない。クラークは此の點に注意せず、彼の賃銀法則は全體としては、必ず勞働者に有益なる結果を生ず可き筈のものにして、そうして實際に於ては定^キまつてかゝる結果を生じて居ると信じて居たから、之を自然法則として設定せんと

したのであると思はれるが、併しそうでないとすると、夫れは彼の立場からは自然法則としては認めらる可きものではなくなる。要するにクラークの自然法則と云ふは、つまりは神の攝理を信する重農學派やアダム・スミスの云ふが如き、倫理的意義を背景とする、或は之を含蓄する自然的秩序や自然法則の概念の如きものにして、方法論上自然科學の設定す可きものと認められる嚴密なる自然法則ではないと思はれる。かくて彼の經濟靜學も結局は嚴密なる自然科學的一學科ではないことになる。尙ほクラークに限らず、限界經濟學者の經濟靜學の概念には、目的論的分子が一般に含まれて居ると思はれるが、さきに本雜誌に於ける拙稿「經濟靜學と經濟動學」の中に述べし如く、フォージェルもシユムペーターの經濟靜學に就て、此の點を指摘して居るのである。

終りにクラークの一般經濟學に就て少しく論評して置く。さきに述べし如く、クラークが一般經濟學の對象と見る一般的なる經濟的事實は、社會經濟内に於ても亦、人間がまだ社會をなさず、單に自然に直面して生活する狀態に於ても存在するものにして、そうして彼は此の事實を便宜上、特にまだ社會をなさない人間に就て、即ち「孤居して獨りで生活する原始人」や「孤獨なエスキモー人」や、同様な「熱帶アフリカのピグミー」や「ロビンソン・クルソー」等に就て考究して居る。併し今日の社會學上では「孤居して獨りで生活する原始人」なるものは承認されない。如何なる原始人も群をなし、單純ながら社會をなして居たものと認めねばならぬ。又孤獨なエスキモー人も

熱帶アフリカのピクミーも實在せず、エスキモー人はヅルケム派社會學者が殊に重要視して研究せる社會をなして生活して居るし、又アフリカのピグミーは社會學者や民族學者が、原始社會の研究上大に重要視する社會をなして生活して居るのである。そうしてロビンソン・クルソーは、偶然に孤島で獨居するに至れる近世歐洲人で、決して原始人でない。彼はレヴィ・ブルルが其の思想、感情、行爲等が主として論理前的及び神秘的心性によりて支配されて居ると云ふが如き眞正な原始人でなく、(Levy-Bruhl, Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures. 及び La mentalité primitive. 拙著「經濟心理の研究」第二章第五節)、又ツルンブルトの云ふ原始人 (Thurnwald, Die Psychologie des Primitiven Menschen) の如きものでなく、實にマクス・ウェーバーの云ふ、合理主義を其の文化の根本特徴とする合理主義的な近世歐洲人 (Max Weber, Die Rationalen und Soziologischen Grundlage der Musik) である。クルソーの生活は合理主義的な近世歐洲人が若し孤島に獨居するとすれば、如何に生活するであらうかを指示するものに外ならぬ。かくてクラークが特に原始人に就て究明せんとする一般的なる經濟的事實なるものは、彼の經濟靜態よりも更に一層現實を離れたる抽象的なものである。是れ靜的社會をも捨象して、構想されたるものであるからである。そうしてクラークは上述の如き原始人及び一般的なる經濟的事實を恰も現實に存在するものゝ如く見做し、之を對象とする一般經濟學は全く社會學から獨立して建設されるも

のと見るのであるが、是れは社會學と他の社會科學との關係に關する社會科學方法論上の重要な一問題であるから、此處に特に少しく論述したいと思ふ。

さきに述べし如く、クラークが一般經濟學の普遍的法則と稱するものは、全然人と人との關係即ち社會的關係から離れて、單に人と自然との直接關係に於ても成立するもの、否なかゝる場合に最も明白に認識されるものと考へるのであるが、果して彼の考へる如くであるか。吾々は彼の企だてたよりも一層詳しく深く分析して行くと、決してそうでないことを發見する。そうして此の問題に就ては、既にギッディングスは詳して論究して、其の大意を其の名著「社會學原理」(Giddings, Principles of Sociology, 1896.) 中に概論されて居るから、此處に其の一般を述べて置く。

ギッディングスの考へられる處によれば、先づ効用に就て最初効用と限界効用とを區別することが肝要である。最初効用とは有用なる財貨の最初の必要なる部分或は増分の消費によりて得られる満足の意味するものにして、限界効用とは其の最後の増分から得られる満足を意味するものである。そうして此の區別は從來純分析的及び抽象的なもの、又只經濟學理論に對して有益であるだけのものと考へられて居たが、併し實際に於ては具體的な歴史的なものにして、隨ふて社會學に對して甚だ肝要なものである。

今最初効用の或萌芽的意識が、社會的關係に先立つて存することは、特に論證する必要はない。相互に認知し得る生物は、自己の食料となるものを辨別し得る。かくて最初効用を認知することが出来る。然るに限界効用に就ては事態は全く異なつて居る。

限界効用の眞義を理解するには、先づ近來經濟學上の文獻に於て認められる處の、主觀的効用と云ふ語を、恰かも只快感(如何に僅かであつても)だけを意味し、之々に加はる或は之れと結合する何物をも意味しないもの、如く解する傾向に注目するを要する。主觀的効用と云ふ語のかゝる使用が放棄されない以上は、經濟學者は脱出する望みなき困難中に陷るであらう。要するに主觀的効用の快感要素は、極微細であるより以上であらねばならぬ。夫れは意識に於て重要と認められ、更に少なくも其の大

小が評價測定され得るだけの大きさを有するものであらねばならぬ。尙ほ快感は主觀的効用の唯一の要素ではない。主觀的効用とは、快感は一の外部的事情或は物、即ち客觀的効用に隨起すると云ふ知識と結合せる快的感情であるので、つまり一の外部的原因に歸せられたる快感である。そうして此の知的原因が含まれて居ると考へられるに非ずは、効用の全理論、多大な努力を費やして構成されたる其の全理論は崩壊すると思はれる。是れ此の理論は常に其の小前提として、左の事を暗に承認して居るからである。即ち感情の變化する諸状態は、夫れが對應する外部の諸條件或は諸事情に於ける質的或は量的變化に關する或度の知識に伴はれるものであると云ふ事である。されば最初効用は、一の外部的原因に意識的に歸せられたる、一の評價し得られる快感にして、限界効用は一の外部的原因の最終作用或は限界作用に意識的に歸せられたる、一の評價し得られる快感である。かくて限界効用は、單に感情としての最初感情と最終感情との差異に加へて、同じ原因の最初作用と最終作用との間の差異の知覺を含むものである。

今右の批判が承認されるとすると、此處に限界効用と社會進化との關係問題は、最初効用の先行性の問題と同様に明亮になる。最初効用の萌芽的意識が團結(有心物或は人間の結合)に先立つと云ふことは確實であるならば、夫れと同様に、團結は最初原因作用から最終原因作用が辨別されることに、かくて限界効用の意識に、先立つものであることも確實である。要するに團結なくしては、意識生活は限界効用の知覺が可能である其の發達階段に、決して到達し得なかつたであらう。そうして主觀的費用は限界効用よりも更に一層複合的な心理現象である。是れ主觀的費用は諸關係の二重の列の知覺、即ち第一には主觀的効用其物を構成する諸關係の一系列の知覺、第二には更に主觀的効用と努力、或は苦痛の他の或様相との間に存在する諸關係の一系列の知覺を含むからである。

主觀的價值は更に尙ほ一層複合的なものである。かくて主觀的價值を快感と同一視することは、主觀的効用を快感と同一視することよりも、更に一層大なる謬見である。今種々なる客觀的効用が認められ、夫れによりて選擇の一範圍が各個人意識に與へられるとすると、其等の効用相互の比較及び其等の効用と夫れの費用との比較が行はれる。効用と費用とは現實に經驗される前に、先づ想像に於て畫かれて比較され、そうして種々なる判斷が作られる。殊に實効的効用が推定される。是れ即ち財貨の同じ諸種類及び諸分量が、慾望の種々變化する事情の下で、満足と與へ得る比較的能力的測定を意味するものである。一トンの石炭の實効的効用は、二月と七月とで異なつて居る。そうして實効的効用の比較的測定を、吾々は價值評定と云ふ。要するに主觀的價值は、まだ實現されないで豫期されるに止まる實効的効用の推定である。夫れは種々なる効用及び種々なる費用の比較から生ずるものである。かくて此等の心理的作用は單純なものでないこと、又毫も團結に負ふ慮ないと云ひ得られる生物(若しかゝる生物があるとすれば)によりては遂行されないものであることは明白である。主觀的價值は只社會の中に於てのみ現はれるのである。

されば以上の論究の全結論を、最も簡単に言述すれば、要するに内部の快感及び苦感と外部の團結とは、始めから不可離的に結び附いて居るのである。最初効用は團結に先立つが、併し團結は限界効用、主觀的費用及び主觀的價值に先立つのである。

されば限界効用、主觀的費用及び主觀的價值等の概念を用ひて、社會を主觀的に解釋することは、到底分析に於て社會の根柢に、又時間に於て社會の始めに、吾人を廻らしめることが出来ない。社會進化は効用の一切の精練に先立つものである。社會進化の進行中に精練されたる効用が現はれる時、夫れは新しき要素として進化過程中に入り込み、其の後行はれる一層高き或は一層複合的な社會的諸發達の多くのものに先立つ。されば此等の社會的諸發達、又只夫れだけが、最も單純なる最初効用の説明以上に進む何れかの効用説（効利説）によりて、主觀的に解釋し得られるのである。かくて効用の單なる始めは社會に先立つ心理現象であるが、併し効用の其の後の一切の諸發達は社會關係を前定するものである。隨ふて抽象的經濟學或は純粹經濟學は、其の全體に於て社會學に先立つ科學であると云ふは謬見にして、單なる効用の始めに關する純粹經濟學の理論は、社會學に先立つが、併し其の大部分に於て純粹經濟學は、社會學を前定するのである。

以上述べしギッディングスの説は、私の社會學の基礎とする新心理學とは異なる、舊心理學を基礎として立てられて居るものであるから、私の社會學から見るとは、種々解釋の仕方改造せねばならないが、併し限界効用、主觀的費用、主觀的價值等は人と人との關係或は有心物と有心物との關係、つまりは心と心との關係を前定して成立するものにして、之れに先立つて存立するものでないことを論證せんとするギッディングスの見解は、大體上私の承認するものである。

尙ほギッディングスは、單なる最初効用のみは社會關係に先立ちて存立するものと認められて居るが、私は夫れも決して社會關係に先立ちて存立するものではなく、ヤハリ社會關係の下で成立するものであると考へる。是れ生物或は人間の最も元素的な慾望或は關心即ち食慾に就て見るも、純粹なる生理的作用としての單なる食慾は、人間を始め一切の生物が本來具有するものにして、社會關係の下で始めて生起するものでないが、併し現實に如何なるものによりて食慾を充たすか、換言すれば現實に如何なるものを食物として欲求するかは、社會關係の下で即ち心と心

との關係によりて始めて決定されるものであるからである。日本人の食慾と云へばつまり米飯の欲求を意味するが、歐米人の食慾と云へばつまりパンの欲求を意味するのである。此の問題に就て此處に最早詳しく論ずる暇はないが、要するに現實なる慾望は、總て社會關係によりて決定されるものにして、かくて單なる最初効用なるものも、つまりは「只社會の中に於てのみ現はれる」のである。但し此の問題に關しては、タールドは其名著 *Les lois de l'imitation* 中他の關係に於て論述して居るから參考されたい。

私は以上述べしが如き理由によりて、クラークが全く社會學から獨立する理論經濟學の最基本部門として、一般經濟學を建設せんとするは、方法論上正當でないと考へるのである。

私はクラークの限界經濟學に對して、方法論上から先づ以上述べしが如き批判を下さんとするのであるが、然るに更に進んで限界經濟學を方法論上徹底的に批判し、そうして其の中に發見される方法論上甚だ重要な或物を闡明するに先立ち、さきに述べし理由によりて、數學的經濟學を考察することが必要であると認めるので、それで次の論文に於ては、數學的經濟學の發達と、其の眞義とを一般的に究明することゝする。